

国際ハイクと季語Ⅱ

——アルゼンチン歳時記の構築について——

井 尻 香 代 子

要 旨

現在多様な言語で作られているハイクの普及プロセスと特色を明らかにするため、筆者はアルゼンチンのケースについて、受容プロセス、季語、韻律、価値観の変化という四つの視点から調査・分析を行った。その後、季語については現地特有の動植物や時候の変化、生活習慣や宗教的、文化的行事を表現する多くの言葉が、豊かな意味と感性を含み受け継がれていることに気づくようになった。移民国家であるアルゼンチンにおいてこうした言葉のグループはさまざまな側面を含みつつ、徐々に共有されることとなった感受性の目録と捉えることができる。本稿では、現時点で重要と思われる言葉を中心に歳時記構築への第一歩を踏み出すことを目指している。第1章では日本の伝統詩歌において季語がどのように誕生し、変化してきたのかを概観し、現代の俳句季語をめぐる状況を考察する。第2章では、国際ハイク研究者や実作者の近年における季語の扱いを検証する。そして第3章では、アルゼンチンのハイク作品集から季語としてふさわしい語を抽出し、歳時記構築に向けた試みに向けていくつかの例を提示したい。この作業は、アルゼンチン・ハイクの特色を理解し、ひいては国際ハイクの現状をあぶり出す試みとなるだろう。

キーワード：日本の伝統詩歌、国際ハイク、アルゼンチン、季語、歳時記

はじめに

現在多様な言語で作られているハイク¹⁾の普及プロセスと特色を明らかにするため、筆者はこれまでアルゼンチンのスペイン語ハイクの事例を中心に次のような視点から調査・分析を行ってきた。

- (1) 受容プロセス (井尻 2011)
- (2) 季語 (井尻 2012)
- (3) 韻律 (井尻 2013)
- (4) 価値観の変化 (井尻 2014)

(1) では 19 世紀末に始まったヨーロッパの芸術革新運動と 20 世紀を通して実施された日本人移民の俳句紹介活動という二つのルートを特定し、(2) では現地のハイクが自然との関わりによる日常生活の変化を題材としながらも、春夏秋冬の季節を示す語の出現率は低いという結果を得た。(3) では 5/7/5 音節のスペイン語ハイクが朗唱される際の音声分析をとおして、日本の七五調とスペイン詩韻律法の特徴を併せ持っていることを検証し、(4) では日本の俳句が

内包する集团的詩作法や自然観が国際的普及にともなってどのように受容されたかに焦点を当てた。

このうち (2) の季語については、近年、国際ハイクにおける関心の高まりが顕著になっている。その理由の一つとして、海外における俳句受容の深化にともなって、日本の伝統詩歌全般についての知識が求められるようになり、和歌、連歌、俳諧の翻訳や解説書の出版が増加したことが挙げられる。スペイン語圏では2008年に『古今和歌集』の翻訳が、2013年に日本の季語を取り上げてその意味を解説した『季語－俳句の季節の言葉』が、2016年に『水無瀬三吟』の翻訳が出版された。二番目の理由は、ハイク作者の増加にともなって、連歌、連句が注目され、スペイン語レンクの作品創作が始まったことである。2014年には在亜日本大使館、京都府連句協会、東西国際財団（在ブエノスアイレス）共催による「京都府連句協会『連句』アルゼンチン・レクチャー・ワークショップ」がアルゼンチン各地の4大学で実施され、各地で多数の参加者を集めた。

こうした流れの中で、地域のハイクにおける季語が注目されるようになり、またレンク作成にあたって「各季の座、去嫌、句数」等を考慮に入れる必要性から、歳時記編集の要望が高まっている。一方、筆者は、現地調査による実作者への聞き取りや次々と出版される作品集の収集を進めるうちに、現地特有の動植物や時候の変化、生活習慣や宗教的、文化的行事を表現する多くの言葉が、豊かな意味と感性を含んで蓄積されつつあることに気づくようになった。移民国家であるアルゼンチンにおいて、こうした言葉のグループは、先住民の文化、祖先の出身地の風俗習慣、ヨーロッパの詩的伝統、ラプラタ地域の気候風土、現地で形成された環境と生活などさまざまな側面を含みつつ、徐々に共有されることとなった感受性の目録と捉えることができる。

アルゼンチンのスペイン語ハイク普及の拠点となり、2000年以降は隔年で「国際ハイク学会」を開催してきた東西学院では、数年前からスペイン語ハイクの歳時記編纂に向けて、季語の収集が進んでいる。そこで本稿では、歳時記構築への第一歩として現時点で重要と思われる言葉をピックアップし、これを含む佳句を例示してみたい。この作業は、アルゼンチン・ハイクの特色を理解し、ひいては国際ハイクの現状をあぶり出す試みともなるだろう。

俳句が国際化し、多様な言語で創作され始めて既に百年以上が経過している。ハイクは当初、「世界最小の詩」として注目された。しかし近年では、ハイクは日本の伝統詩歌とのつながりを維持する独自の詩的ジャンルであることが広く認識されるようになった。既に述べたように、その重要なキーワードの一つは「季語」である。また、日本の俳句は「新傾向俳句」「新興俳句」「前衛俳句」の三度にわたる季語廃止の運動を経験しながら、現在、季語の重要性を認めるに至っている。こうした国内の傾向も、このジャンルにおける季語の重要性の証左と考えられる。

本稿では、次のように分析を進める。まず第1章で日本の伝統詩歌において季語がどのように誕生し、変化してきたのかを概観し、現代の俳句季語をめぐる状況を考察する。尤も、季語

やその歴史的考察として、中国の歳時記の影響を受けた漢詩から、『万葉集』、『古今和歌集』、『金葉集』、『新古今和歌集』などの和歌集の分析、『応安新式』にはじまる連歌作法の諸書と『菟玖波集』など連歌集の考察、さらに俳諧の連歌における芭蕉をめぐる論考など幅広く詳細な研究が存在する。しかしここでは、季語がどのように現在の俳句において重要な機能を果たす存在となったかという経緯に焦点を当てて分析を進めたい。第2章では、国際ハイク研究者や実作者の近年における季語の扱いを検証する。とりわけ、スペイン語圏における、1960年代から現代にいたる季語の受容について、どのような文献を参照し、伝統詩歌においてどのような役割を持つものとして理解されているのかを考察する。そして第3章では、まず、2012年に調査を進め、公刊した拙論「国際俳句と季語－アルゼンチン・ハイクをめぐる－」において取り上げたアルゼンチン季語調査の概要を紹介する。その上で、今回新たに収集し、分析したアルゼンチンのハイク作品集の中から季語としてふさわしい語を抽出し、初めての試みとなる歳時記の様式、即ち、「項目、地理・歴史・文化的解説、例句」という形式を整えた例を示したい。最後に、2012年調査の結果と今回の歳時記項目作成をとおして明らかになったアルゼンチン・ハイク季語使用の現状について掘り下げ、まとめる。

1. 季語の誕生と変化

1. 1. 和歌集と部立

最初の勅撰集として編纂された『古今和歌集』において、はじめて春・夏・秋・冬の部立があらわれる。この、四季によって歌を分類するということは、その後勅撰集のみならず私撰集でも踏襲されたので、これは日本の抒情詩において画期的な出来事であったといえるだろう。額原退蔵は、凡河内躬恒の「夏と秋とゆきかふ空の通ひ路はかたへ涼しき風や吹くらむ」を挙げて、当時の歌人の自然鑑賞の態度が理知的であり、表現は技巧的であることを指摘した上で次のように述べている。

季節の交替に対する芸術的感興などといふものはどこにも認められない。これは固より芸術の正道といふ事は出来ないであろう。だが単に季題的観念といふ点だけについて考察してみると、こうした暦数上の抽象的な季節のことまでも歌ふというふ事は、確かに季に対する歌人の注意が鋭くなって来てゐると言はねばなるまい。(中略) しかもその詠歌の対象となる自然の風物が、四季によってほゞ一定して来たことも注意すべき事である(額原十一：14)。

古今集に春の歌として詠まれたものの題材は二十ほどであるが、そのうち鶯、梅、花、桜が過半数を占め、夏の歌では郭公が抜きでいる。月はまだ秋の風物とされていない。しかし『源氏物語』や『和泉式部日記』などにもみられるように、平安朝文学を通じて季題に対する趣味や季節感は次第に深まっていったと考えられる。そして平安後期の『金葉和歌集』、そしてほ

は同時期の『堀川院御時百首和歌』になると、花（春）・郭公（夏）・月・紅葉（秋）・雪（冬）に代表される「五箇の景物」が揃い、主要な題目が定められたといわれる。春の花（桜）、夏の郭公、秋の紅葉、冬の雪などそれぞれの季節の景物として既に多く歌に詠まれてきた季題とは異なり、一年中見られる月が秋の題とされたことは、季語の歴史にとって重要な変化を示している。月が最もその本性を発揮する、つまり優美である時期が秋であることを、歌人もこれを受け取る側も共通認識として持つにいたったことを意味するからである。詠われる風物の本性の美しさ、つまり「本意」が徐々に共有されていった一例と見なすことができる。

『堀川院御時百首和歌』の歌題構成は季の題七十、恋十、雑二十であるが、季題の内訳は春二十（立春、鶯、桜、春雨など）、夏十五（更衣、郭公、五月雨、螢など）、秋二十（立秋、萩、月、紅葉など）、冬十五（時雨、雪、千鳥、神楽など）となっている²⁾。

鎌倉時代に入ると、新古今和歌集が編纂され、藤原定家のよく知られた「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」に代表されるように、客観的叙景の中に深い感慨を感じさせる歌が詠まれるようになる。こうした傾向を頼原は次のように分析している。

四季の景物に対する聯想感情の固定という事が、かうした結果を齎した一つの原因であるといふ風に考へられない事もない。即ち古今集時代までは、たゞ虫が鳴く、秋風が吹くといふだけでは、その寂しい情なり、悲しい心もちなりが、すぐ読者には勿論作者自身にも強くひびかなかつた。勢ひ悲しいとか淋しいとか、それをあらはに表現せねばならぬ必要があつた。しかしそれ以来、いつとなく養はれてきた所謂季題感が、もはや虫の音、秋風のそよぎそのものからすぐ寂寥の感をうけ容れ得るほど密接に、それ等の題材と結び付いて来たのである。かうして和歌に於ける所謂季題感は一層深くなって来た（頼原十一：20）。このように、作者にも読者にも和歌の題材とそれがもたらす「心もち」「感受性」が結びついた「季題」が確定し、その「本意」も深まっていった。

1. 2. 連歌と季語

鎌倉時代にはまた、短連歌を経て五十句、百句を連ねる長連歌が盛んになった。この連歌の式目を整え、後の興隆をもたらした二条良基の連歌論書『連理秘抄』（1349 成立）には、「發句に時節の景物そむきたるは、返々口惜しき事也。ことに覺悟すべし。景物のむねとあるがよきなり。」という心得とともに、正月から十二月までの季題とすべき景物四十種があげられている³⁾。大部分は自然の景物であるが、正月の「野をやく」、六月の「氷室」、八月の「擣衣」などの人事もかなり増えていることにも注目したい。連歌の發句において、なぜこうした季節に関する言葉が必須とされたかについて頼原は、連歌のはじめが即興的な性質のものであったことを挙げ、次のように結論づけている。

和歌の会の余興として、或は一時の言捨てとしてのみ行はれた連歌は、それが五十韻・百韻と發達して、すでに和歌の附傭物たる境を離れ、若しくは一時の座興でなくなってしまう

ても、なほ発句のみには当座の興を専らとする最初の名残が残っていた。しかも已に特殊の場合の即興でなくなっているのだから、そこには何時でも又何人にも興趣を感じさせるような題材を別に選ばねばならない。それには何よりもまづ、折節にあった句をよむ（中略）事が最上の策でなければならなかった（頼原十一：22）。

こうして、『筑波問答』（1372 成立）にも、最初の準勅撰連歌集『菟玖波集』（1356 成立）の発句にも無季の句は一句もなく、発句と季語とは分かちがたく結びつけられることとなる。即興性の名残を残す発句には、当時既に詩趣を呼び起こすキーワードとなっていた季の言葉が「折節の風流」として求められたのである。また、時代を追って深まった季題感や本意の追求を反映して、連歌では式目によって各季節の座や句数、花・月の座が定められた。これにともなって作者たちが共有できる季題の一覧表の必要性が高まり、自然の景物だけでなく、人事である農事や年間行事を含めた広汎な目録が形成された。季題を集め、四季や十二ヶ月に分類した「季寄せ」が見られるようになる⁴⁾。

1. 3. 俳諧と季語

連歌における季の問題が厳格な式目の元に置かれ、連歌そのものも形式的で真面目な性質を帯びてくると、新たに即興的、遊戯的な詩歌が求められるようになった。こうして俳諧の連歌が誕生し、煩瑣な式目を脱して自由に遊ぶ座が設けられた。しかし、俳諧連歌集として最も早く成立した宗鑑・守武時代の『新撰犬筑波集』、『守武千句』でも発句は必ず四季の部のいずれかに属していた。その後の貞徳・談林の時代に至ると、俳言を取り入れた季の言葉を細かく分類した俳諧作法書『御傘』や俳諧季寄せ『山之井』が著わされ、俳諧においても季の問題が重視されたことが伺える。

芭蕉の時代になり、俳諧が文学としての基礎を確立すると、季の問題は和歌以来の伝統を担う最も重要な要素となる。芭蕉は季の問題を掘り下げると同時に、季の言葉の刷新に着手する。『常盤屋の句合』の跋で、「詩は漢より魏にいたるまで四百余年、詞人・才子・文体三たびかはるといへり。倭歌の風流、代々にあらたまり、俳諧年々に変じ、月々に新也」と述べ、「風雅」は「流行」して一日も止まることがないことを強調している（芭蕉九：29）。小宮豊隆は、このように変化する芸術に携わるものとしてどのように対処すべきかという問いへの答えが不易流行説であるとし、土芳の『赤冊子』を引いて次のように解説している。

不易とは「誠によく立たる姿」―「誠」の上にしかと足を踏みしめている姿である。流行とは、その「誠をせむる」事によって「一步自然に進む」姿 ― つねに「誠をせむる」事によって、つねに「一步」ずつ「自然に進」んでやまない姿である。（中略）流行は、いわば、絶えざる脱皮である。絶えざる脱皮であるから、新しい。芭蕉は俳諧に於いて新しみを重大視したが、しかしその新しきは物の新しみではなくて、心の新しみであった。しかもそれは人が不易をつかんで絶えず流行する事によってのみ、可能になると考えたのであ

る（小宮：15-16）。

こうした考えのもとに、芭蕉は単なる連歌の道具立てとなっていた季題を、当時の生活の実感がこもった新しい言葉に鍛え直した。次に挙げる春夏秋冬の句に用いられた季の言葉には、いずれも江戸時代の生活や旅の中で手に取るように感じられた季感が表現されている。同時に桜、蝉、白菊、初時雨という季語を中心として成立した十七音の作品には、芭蕉の追求した不易－「誠」が息づいており、今日も名句として胸を打つのである。

木のもとに汁も膾も桜かな（ひさご）

閑さや岩にしみいる蝉の声（奥の細道）

白菊の目にたてゝ見る塵もなし（木枯）

初時雨猿も小簀をほしげなり（猿蓑）（芭蕉一、二、三参照）

1. 4. 俳句と季語

明治開国後、俳諧の発句から独立して成立した俳句は、発句には「現時現場」の季を入れること、という規定をそのまま受け継いだ。俳句は一句として完全な独立性を要求されたので、限られた十七音を活用する上で季語は絶大な効果を発揮した。和歌以来の季の言葉は人々の共有できる豊かな余情を保持しており、さらに芭蕉俳諧によって見いだされた新しい感覚も備えていた。これらの季語目録は上述のように「季寄せ」という形で公開されて実作に用いられ、北村季吟の『山之井』（1647）以降は本意の解説に加えて例句が添えられるようになった。

明治以降は太陽暦に合わせて改編され、今日まで多くの歳時記が出版されてきたが、その一方で本稿冒頭に述べたように無季俳句運動も繰り返し起こった。これまで見てきたように、季題・季語は日本の詩歌にとって最も重要な要素のひとつであるが、形式化して人々の実感に沿わなくなると変革の動きが生まれてくる。そうした動きの最近の例として、次に二つ挙げてみたい。

一つは、無季を容認する現代俳句協会を代表する俳人たちが編纂し「今の暮らしに合った歳時記」を目指す『現代歳時記』である。季節の移りである二、五、八、十一月には二つの季節を持たせ、見出し・類語一万三千三百八十九語のうち半数近くが無季の「雑」に含まれている⁵⁾。二つ目は、実景と詠まれる世界との関わりを重視した「俳句地貌論」⁶⁾である。宮坂静生は、現在の季語、歳時記は都であった京都ないしは畿内を中心とした地域を想定して編集されており、日本の他地域の俳句作者・読者には実感の薄いものであることを指摘する。地貌とは地理学で、地形が陸か島か、地表が平坦か斜面かなど、土地の形態を指す用語である。宮坂は、それぞれの地の個性を大事に考え、風土の上に展開される季節の推移、生活、文化までを包含する言葉として用いている。「地貌季語」を集めた季語集も2冊公開している（宮坂2006, 2008）。沖縄の旧暦三月を指す「うりずん」、信州や北陸の雪解けを表す「木の根明く」など、固有の風土における季節の推移とともに生活が営まれ、文化を生み出していることを実感させる季語である。

このように、近現代の俳句においても季語見直しの試みは進められている。無季の語（キーワード）を歳時記に含めて継承する方向と、南日本や北日本など地域の多様性を取り込もうとする方向であるが、いずれも伝統的な季語を否定するのではなく拡張する方向であるといえるだろう。これまで和歌、連歌、俳諧、俳句作品の中に受け継がれてきた季題・季語は、時代の変化や地域の差によって違和感を生むことはあっても、日本の詩歌が求めてきた「風雅の誠」を不易流行の相の中に表現する広汎で豊かな目録である。絶え間ない見直しを必要とするとはいえず、伝統詩の継承には不可欠な要素であると言わざるをえない。

2. スペイン語ハイクと季語

2. 1. 季題と本意

1972年、スペイン語圏で最初の本格的な俳句研究書『日本の俳句』が出版された。著者フェルナンド・ロドリゲス＝イスキエルドはイエズス会士養成期間のうち三年半を日本で過ごし、日本語の習得と日本文学の研究に取り組んだ。『日本の俳句』は、伝統詩歌全般にわたって万葉集以前から和歌、連歌、俳諧、俳句、短歌までの変遷を理論と歴史の両面から丁寧に解説した力作であり、今日のスペイン語圏における日本文学およびハイク普及に多大な影響を及ぼした。

ロドリゲス＝イスキエルドは、季語の発展について潁原退蔵、浅野信、山田孝雄などの日本古典文学研究者の著書を引用しつつ概説しているが、とりわけ季題と本意の関連について注目し次のように述べている⁷⁾。

宗祇は季題に忠実であることを、物に内在する「誠」に通じることであると解釈した。この姿勢を明らかにする概念が「本意」（真実の意図）である。山田孝雄は（中略）本意について言葉や詩全体の中に存在するものとしている。例えば春の本意は、実際には雨や嵐の日があったとしても、静かで、穏やかで、柔らかなものである。（ロドリゲス＝イスキエルド 1972：61）

そして宗祇によってこのように確立された季題は、実作の時期に合わせながら子規の時代まで存続したとし、季題の本意は芭蕉によって最も深められたと結論づけている。

2. 2. 俳句と歳時記

その後、スペイン語圏では日本の詩歌の翻訳書、研究書、さらにはスペイン語ハイクの句集が多数出版されたが⁸⁾、ほぼ四十年後の2013年に太田靖子、エレナ・ガジェゴによる日西対訳版『季語』が公刊された。春夏秋冬と新年の各季三十～四十の季語、解説、例句が紹介されているが、序文は『日本の俳句』出版後、スペイン南部セビリャの国立大学人文学部で長く文学の教鞭を執ったロドリゲス＝イスキエルドが執筆している。この序文では、俳句の形式上の特徴についてスペイン語詩の短詩型と比較した後で、俳句の内容に関して最も重要なものとして

「季節感」を挙げている。まず、神道においては自然と人々の生活が重要視されていることを指摘し、特に連歌と季語とのつながりの深さを次のように強調する。

つまり、発句において季語は（何らかのシンボルによって当季に言及することにより）実作の期日を証明すると同時に、歌と自然との結びつきを確認する。しかし、座の進行とともに歌によって詠まれる雰囲気も季節への言及も変わり、絵巻物が展開するように季節を移ることができたのである（ロドリゲス＝イスキエルド 2013：17）。

このような「連歌起首の日付証明としての季語」という考え方は、額原の言う「連歌の即興性の名残としての季語」とは異なるものだが、発句を「今、ここ」即ち、現時現場につなぎ止めるものとして捉える視点において通底しており興味深い。またロドリゲス＝イスキエルドは動物、植物、行事、生活など季節のシンボルである季語の種類について述べた後、歳時記についても取り上げている。

本や冊子の体裁を取った暦が存在し、五つの季節それぞれについて広汎な目録を備えている。「歳時記」と呼ばれる暦であり、季節のシンボルとしてそこで用いられた言葉の用法を例証するために著名な詩人たちの句がしばしば掲載されている（ロドリゲス＝イスキエルド 2013：17）。

その上で、今後のスペイン語ハイクの内容について述べた箇所では、季語や歳時記について次のような意見を展開している。

我々の文学には－日本で起こったこととは異なり－ハイクにいわゆる季語を入れることを必須の要件とするような伝統はない。たとえスペイン語ハイクにおいて季語のある程度のリストや暦などが作られたとしても、むしろ用例の統計として考えられ、常に自由があるだろう。本質的なことは、ハイクは理性ではなく感性に呼応し、人間も含めた自然を扱うということである（ロドリゲス＝イスキエルド 2013：30）。

スペイン語圏におけるハイク受容のパイオニアにとって、スペイン語ハイクの季寄せや歳時記の構築は、義務的には用いないとしても、やがて来たるべきものとして想定されているように思われる。

3. アルゼンチン歳時記構築に向けて

3. 1. 「季寄せ」から「歳時記」へ

筆者は2012年に公刊した「国際ハイクと季語－アルゼンチン・ハイクをめぐる－」において、アルゼンチン人作家によって出版されたハイク詩集から1128句を抜き出してトピック（季語・通年の語）の分類を行った。分類方法は、現代俳句キーワードの集大成といわれる『現代歳時記』とウィリアム・J・ヒギンソンの *Haiku World*（『俳句・国際歳時記』）を参考とし、次のように行った。まず全体を「冬」、「春」、「夏」、「秋」の四つの季節と、それらのいずれにも

限定できない「通年」の五つの区分に分ける。各季節においては、項目を「時候」「天文」「地理」「植物」「動物」および「人々の生活」とする。「通年」の区分においては語彙が広範に亘るので項目を増やし、「時候」「天文」「地理・空間」「植物」「動物」「物質」「人間」「社会・生活」「文化・宗教」「固有名」とした。

この調査で得られたトピック数は827語に上り興味深い特色が明らかになったが、このような分類自体は、季節に関わる言葉を列挙した「季寄せ」であり、上記のロドリゲス＝イスキエルドが言うように「用例の統計」に過ぎない。第1章で確認したように、和歌から俳句にいたる詩歌の伝統において洗練され、革新されてきた季語とは「生活や旅の中で手に取るように感じられた季感」であり、「折節の風流」であった。このような「季感」を呼び起こす言葉を見だし伝承するためには、現地の風土に根ざした解説と例句を収録した「歳時記」が必要となる。

もちろん歳時記の編纂には、まず現地のハイク作品について通時的、同時的な視野を持った収集と分析が必要であり、さらにこれを基盤とした息の長い編纂作業が求められる。したがって本稿の試みは、未来のアルゼンチン歳時記構築へ向けたささやかな提案に過ぎない。しかしながら、日本の詩歌が千年以上にわたって育んできた、季題・季語という詩的共有財産なしでは今日の俳句は成立せず、また言語を超えて世界に普及することはなかったであろう。このような季語の体系がアルゼンチンの風土に移植されることによって、俳句の受容プロセスは一層深まり、今後のスペイン語ハイク、レンクの発展が促進されると思われるのである。

3. 2. アルゼンチンの風土

そこで本稿では、多数のハイク詩集出版や定期的に行われるハイク・コンクールによって作者、読者ともに増加しているアルゼンチンのスペイン語ハイク作品から、風土や気候の実感を伴った春夏秋冬の「季語」と呼ぶにふさわしい言葉を選び、解説と例句を付して歳時記の項目を各季一例ずつ提示したい。本来、歳時記には例句の出典を付さないが、本稿では注を付けて引用元を明記する。

まず、アルゼンチンの地理と気候について概説しておこう。アルゼンチンの暦は日本の対蹠地にあたるため季節が反対になり、以下のように区分されている。

春：9月（春分）～12月（夏至）

夏：12月（夏至）～3月（秋分）

秋：3月（秋分）～6月（冬至）

冬：6月（冬至）～9月（春分）

日本と同様、ほぼ全域が温帯気候区に属し、四季の変化がある。国土が南北に細長いため、北部には亜熱帯を、南部には寒冷地を含む。地形はアンデス山脈とその東に広がる平地に大別され、平地部は温帯草原パンパと南部のパタゴニア台地からなる。北半分には広大なラプラタ川水系が発達し、首都ブエノスアイレスはこの大河の河口に位置する。

アルゼンチン国民は、欧州系（スペイン、イタリア）が97%、先住民系が3%となっており⁹⁾、生活、文化、宗教面では西欧ラテン系の伝統が主に受け継がれている。先住民系は少数だが、20世紀初めまで継続された先住民征服の歴史への反省と、これに伴う文化的アイデンティティーの見直しによって、近年は北部山岳地域および南部パタゴニア地域に居住する先住民文化の掘り起こしと復権が進んでいる。一方、中国、韓国、インド、日本などアジア地域からの移民社会は小規模であるが、これらの文化への関心は高く、俳句の受容とスペイン語ハイク普及もその一例といえるだろう。

3. 3. アルゼンチン歳時記

本稿のアルゼンチン歳時記の試みでは、地域特有の季語を二つ（春と冬）、ヨーロッパや日本など複数の文化の影響が感じられるものを二つ（夏と秋）選定した。同時に素材分類にも配慮し、植物、動物、天象、時候から一つずつ項目を提示した。なお、アルゼンチン歳時記は、本来スペイン語ハイクを対象として編纂されるものであり、スペイン語版をベースとして作成したが、ここでは日本語版を提示している。

春

ハカランダ: キリモドキ属ノウゼンカヅラ科の落葉高木。ハカランダは、現在もパラグアイ、ブラジル、アルゼンチンに広く居住する先住民グアラニー族の言語であるグアラニー語の名称である。樹高は10～15m、幹の直径は60cmほどになり、アルゼンチン北部トゥクマン、パラグアイ、ブラジル、ボリビアに広がる亜熱帯樹林に自生する。アルゼンチンでは北部全域と首都ブエノスアイレスで広く栽培され、南米固有の花木としては最も美しいものの一つである。繊細な葉叢と釣鐘形の豊かな薄紫色の花はともに見事で、十月から一月にかけて北から南へ次々に開花し、やがて一斉に落花した後に葉が芽吹く。十月末になるとブエノスアイレスは薄紫に染まり、人々は花を眺めながら市街地を散歩し、春の訪れに胸を弾ませる。アルゼンチン人にとって、薄い青紫の花は、空の色であり、水色と白の国旗の色でもある。

夕空と ひとつに溶けて ハカランダ ビルマ・アントリナ・レコデル¹⁰⁾
ハカランダ 広場に零る 空の青 カルロス・A. アドリアン・ラモス¹¹⁾

夏

蜘蛛（蜘蛛の巣、蜘蛛の糸、悪魔の涎）: 節足動物で気管を持ち、八本脚で頭部と胸部の境界が明確でない。粘着性のある絹状の糸を分泌する。アルゼンチンには48科に分類される1000種類が生息する。数百から数千匹の蜘蛛の子は生まれてしばらくすると、糸を出して風のように空を飛ぶ。アルゼンチンの地方ではよく目にするこの糸の吹き寄せられた束を、フリオ・コルタサルは1959年の短編タイトルと同じく、「悪魔の涎」と呼ぶ。文学ではしばしば、ギリシャ・

ローマ神話の蜘蛛に変えられた村娘アラクネのように巧みな織手として登場するが、張り巡らせた巣で待ち受けて昆虫を捕獲することから悪意や強欲のシンボルともされる。一方、ヨーロッパの民間伝承では眠って夢を見ている人の魂を運ぶとされている。

雨やみて 月の滴り 蜘蛛の囿に	フアン・カルロス・ドゥリレン ¹²⁾
夏の風 フェンスに悪魔の 涎かな	ロランド・L. パシエンテ ¹³⁾

秋

月（満月、半月、三日月、新月）：太陽と同様、シンボルとして重要な天体である。太陽の光を受けて輝くこと、また女性の月経と同じ周期を持つことから、女性と考えられてきた。定期的に満ち欠けを繰り返すことから死と再生のシンボルでもある。アルテミスは処女を守護し狩猟を司るギリシャ神話の月の女神である。絶え間なく姿を変えるため、はかなさ、移り気、気まぐれ等の特徴と結びつきやすく、月の光は狂気を引き起こすと考えられた。かつて錬金術師は光の色から、月を銀と、太陽を金と結びつけていた。日本の連歌や俳諧では、月は秋にとりわけ明るく美しいことから、最も重要な秋の季語とされた。

月の出や 野すゑに届く 影一つ ¹⁴⁾	ホルヘ・ルイス・ボルヘス ¹⁵⁾
口づけて 驢馬は水面の 月を飲む	アンヘラ・モリナ・アロンソ ¹⁶⁾

冬

ソнда：アルゼンチンの冬に吹く熱く乾燥した強風で、多くの砂塵を含んでアンデス山麓に吹き下ろす。太平洋の南極に近い海域で冷たく湿潤な風として発生し、アンデスの山嶺を越えてクーヨ地方に雨や雪を降らせる。その後ラ・リオハ、サン・フアン、メンドサに向けて吹き下ろし、フェーン現象のため熱く乾燥した風となる。クーヨ地方の最後の先住民となったウアルペ族には、ソндаの起源をめぐる伝説がある。ウアンピは強く足の速い若者で、弓で狙った獲物を逃すことがなかった。うぬぼれて山の動物を手当たり次第に狩り、動物の守護神ヤスタイの警告も聞こうとしなかった。ついに大地母神パチャママの怒りに触れ、砂塵を含んだ竜巻に地上にあるもの全てとともに巻き上げられてしまった。そのとき以来、パチャママを敬わない者が現れると、ソндаが吹くという。

夏のパンペロ、冬のスデスタダ（南東風）と並んで、アルゼンチンの最もよく知られる季節風の一つである。

ソнда過ぎ 埋もれし白土 採取場	フアン・カルロス・ドゥリレン ¹⁷⁾
月めざし 峡谷駆けける ソндаかな	ネリ・L. メンディアラ ¹⁸⁾

以上、歳時記の4項目を示したが、3. 1. で言及した調査結果の中から、さらに季節ごとにいくつかの使用頻度の高い季語を取り上げて、アルゼンチンの季語使用の傾向を分析し、その

特徴をまとめることとしたい。各語には、どのような季節感をもたらすのか短い解説を付す。

春の季語としては「十月」、「クローバー」、「燕」等がある。「十月」は南半球の春の訪れと結びついた語であり、「クローバー」は町や村から郊外へ続く道、そしてその先にある牛の放牧を行う牧場を想起させる。「燕」は主に北米から飛来する旅鳥の代表であり、春の使者である。

夏の季語には「小麦畑」、「ジャスミン」、「ハチドリ」等が挙げられる。「小麦畑」は主食のパンをもたらし、内陸パンパ地方の典型的な景色を構成する。「ジャスミン」は芳香を放つ花をつける数種の灌木を指し、地域によって様々な種類がある。「ハチドリ」はこの季節には南米北部の亜熱帯地域から飛来し、ホバリングして蜜を吸う可憐な姿は明るい夏を告げる象徴である。

秋の季語としては「葡萄」、「復活祭」、「フラミンゴ」等がある。「葡萄」は食用というよりも、主にフランスから移植され、アンデスの麓メンドサを中心に広く生産されるワインをもたらす実りである。「復活祭」は北半球では春の宗教行事ながら、ここでは秋の季感を備えている。「フラミンゴ」は、南米南部に固有の種がパタゴニア地方とパンパ地方を移動して暮らすため、これらの地域では親しみのある鳥である。

冬の季語には「冬霧」、「山茶花」、「子鯨」等があり、「冬霧」は内陸部、海岸部ともに深い霧に覆われることから、冬の気候を代表する語となっている。「山茶花」は、アジア原産ながら植物園や家の庭で手を掛けて栽培され、数少ない冬の花として愛されている。「子鯨」は、パタゴニア地方の海岸で子育てをするセミクジラの仔を指し、この季節には母仔鯨の潮吹きが海岸から見られ、冬の風物詩となっている。

以上の傾向から、まず、アルゼンチンの季語を次の4種類に分類してみたい。

- (1) 地域固有のもの（ハカランダ、ハチドリ、フラミンゴ、仔鯨、蜘蛛、冬霧、ソンダ、十月）
- (2) ヨーロッパ文化の影響を受けたもの（蜘蛛、月、小麦畑、ジャスミン、クローバー、葡萄、復活祭）
- (3) 日本文化の影響を受けたもの（月、山茶花）
- (4) より一般的なもの（燕、冬霧、十月）

しかし、上記で複数項に分類されている語があるように、入り組んだ文化的背景を担うものも多く、この分類で完全に分けることはできない。例えば、「十月」は一般的な月名であるが、南半球では北半球とは反対の季節感とともに感じられる。「月」にはヨーロッパと日本双方の詩的伝統が含まれている。また、「蜘蛛」にはヨーロッパから持ち込まれた神話と、地域固有の感受性が混じりあっており、「冬霧」は一般的な気象用語であるが、主にラプラタ水系がもたらす重く陰鬱な冬期の気候が反映されている。

ここから、次のようなアルゼンチンの歴史が浮かび上がる。3. 2. の国民に関連して少し指摘したように、15世紀から進んだスペインによる先住民征服と、19世紀初頭までの植民地時代、これに続いてヨーロッパ各地から大量の移民を受け入れた移民の世紀、さらに東アジアからの移民が流入した20世紀である。アルゼンチンでは、こうした歴史の変遷が文化の複雑な重層性

を構成することとなった。

15世紀までは大陸外部と接触のなかった先住民は、征服による文化消滅の危機の中でも、南部パタゴニア等の寒冷地、内陸部パンパ、北部アンデス山地で、生活文化や音楽、歌謡や神話を伝承してきた。地域特有の動植物や地理等の名称の一部は、後に入植した移民にも受け継がれ、ヨーロッパから持ち込まれた文化と混合している。移民の世紀には、スペインとイタリアの労働者を中心に、鉱山や鉄道に関わる商社のイギリス人、フランス人、ドイツ人等に加え、傭兵として導入された中央ヨーロッパ出身者等多様な言語文化を持つ人々が首都をはじめ各地に居住するようになり、前世紀には中国人、韓国人、日本人移民が渡ってきた。しかし、植民地時代を通じて言語教育の基盤は確立されており、スペイン語圏以外の文化を継承する人々においても、母語、民間伝承、韻文・散文等の文学言語にいたるまでスペイン語とその韻律法が維持されてきた。

一方、アルゼンチンは1810年にスペインからの独立を果たした新しい国家であり、アルゼンチン人としての文化的アイデンティティは形成途中にある。上記のような文化的重層性は、さらに地域によって濃淡の差があり、1. 4. で言及した「地貌季語」にふさわしいものも生まれている。しかしながら、現在、北部アンデス山地から南部パタゴニアにわたって広い地域で作られるようになったアルゼンチン・ハイクの季語には、南米南部という所与の環境の中で暮らす、多様な文化的背景を持った人々の詩的感性が畳み込まれており、季語の収集や歳時記編纂への歩みには、そうした詩的言語の確認と共有への意図が感じられる。日本における伝統詩歌の歴史が、その発展とともに季題・季語を洗練し、刷新してきたように、アルゼンチン・ハイクやレンクも、自然環境の中で変遷する季節を表す「本意」の追求や季語の探求を通じて、日本の俳句や連句受容の新しいプロセスに進もうとしているように思われる。

まとめ

本稿では、日本の詩歌の発展にともなって、まず四季の部立てによる和歌の分類から始まり、季語の確立と本意の追求が進められてきたことを確認した。また、「季寄せ」や「歳時記」の整備と普及により、連歌、俳諧と広がっていった詩歌の世界では、季語と季感が共有財産となり、時代の変化を取り込んで更新され洗練された経緯を辿った。そして、この伝統を受け継ぐ俳句の作者たちが、現在も季語の拡大と刷新の試みを続けている現状も概観した。

一方、俳句は言語の境界を越えて様々な地域で実作されるようになり、各言語圏の文学において独立した詩的ジャンルとして認識されるようになっていく。このジャンルを規定する詩学について、ほとんどの研究者や作者が日本の伝統文学とのつながりを説き、詩型、季語、切れ字などの道具立てに加えて不易流行などの詩学＝世界観に言及している。

しかし季語については、日本特有の気候風土と現地のそれとの差違にのみ着目して、十分な

考察が行われてこなかったように思われる。そこで本稿では、季語がこの詩的ジャンルの本質に触れる要素であることを踏まえたうえで、地域の気候風土に結びついた季語が生まれていることを指摘した。そして、アルゼンチン歳時記の項目作成に向けて、実際に季語として機能している言葉を選び、そこに、ギリシャ・ローマ神話に遡る詩的伝統、ヨーロッパの民間伝承、カトリシズム、アルゼンチン文学、南米固有の地理や生態系、先住民文化の伝説、アジア系移民の文化など、この地域の人々の日常生活を取り巻く文化的重層性の反映を確認した。こうした分析を通して、アルゼンチン・ハイク作品の中に、季節の言葉への感受性が徐々に共有されていること、そして季語の探求と歳時記への関心の高まりによって、日本の俳句受容が次のステップへと向かっていることが検証できたと思う。

最後に、スペイン語圏のハイク作者や研究者によって最もよく知られ、多く引用されている芭蕉の言葉を紹介しておきたい。「柴門辞」とも「許六別離詞」とも題される文章中の一節、「古人の跡をもとめず、古人の求めたる所をもとめよ」である¹⁹⁾「芭蕉の芸術のねらひ所をあきらかに」したものとして古来注目されてきた一節であるが²⁰⁾、俳句の本質をどのように現地のハイクにおいて表現するかという点が最大の関心事となっていることが窺われる。アルゼンチン・ハイク季語の探索と洗練とが、今後のスペイン語ハイクの発展と深化に資することを願う。

注

- 1) 本稿では、外国語で“haiku”, “renku”として書かれた作品またはそのジャンルを、日本の俳句、連句と区別して「ハイク」、「レンク」と表記する。
- 2) 宮坂静生は和歌の季題として、代表的なものが450あったと記している（宮坂2009：193）。
- 3) 二条良基『連理秘抄』中、「發句は最も大事の物也。」としてその心得を述べた箇所に、特にその時節の物として、昔から詩歌に詠まれ珍重されてきた自然の風物を取り上げて詳述している。（『連歌論集 俳論集』日本古典文学大系66、岩波書店、昭和36年）
- 4) 『能因歌枕』（平安中期）、『古今和歌六帖』（10世紀後半）、『連歌天水抄』（1561）、『至宝抄』（1586、1627）。
- 5) 金子兜太、黒田杏子、夏石番矢『現代歳時記』、たちばな出版、2001年三訂版。
- 6) 宮坂静生『俳句地貌論 21世紀の俳句へ』、本阿弥書店、2003年。
- 7) 以下に引用するスペイン語文献の和訳は、特に断りのない限り全て筆者による。
- 8) 1994年に再版された『日本の俳句』には、この時点で既に60点の参考文献表が付されている。
- 9) 日本国外務省ホームページ、アルゼンチン共和国基礎データによる。
- 10) Miyakawa, Liria et al, *Haiku: tanka senryu*, De Los Cuatro Vientos, 2007, p.127.
- 11) Ramos, Carlos A. Adrián, *Haiku*, Dunken, 2000, p.185.
- 12) Durilén, Juan Carlos, *Gotas de luna: Haikus*, Edición de autor, 2015, p.114.
- 13) Paciente, Roland L. Paciente, *Haiku. Desde el camino*, Dunken, 2012, p.69.
- 14) ボルヘスの作品の翻訳は、高橋睦郎の「傳奇亭吟草」（雑誌『すばる』1999年10月号所収）より引用した。
- 15) Borges, Jorge Luis, *La cifra*, Alianza, 1981, p.101.
- 16) Molina Alonso, *Haiku por argentinos*, Dunken, 2006, p.19.
- 17) Durilén, Juan Carlos, *Gotas de luna: Haikus*, Edición de autor, 2015, p.175.

- 18) Mendiara, L. Neri, *Haiku III*, Dunken, 2008, p.171.
- 19) アルゼンチンでは 2 種類の翻訳があり、しばしば引用されている。スペイン語圏で最初に芭蕉から 20 世紀の俳人までの広汎なアンソロジーの編纂、翻訳を行ったアントニオ・カベサスによる直訳 “No sigas las huellas de los antiguos. Busca lo que ellos buscaron.” (古人の跡に続くな。彼らが求めたものを求めよ) と、芭蕉の作品や言葉を自らの詩集中にコラージュして強い印象を与えたフリオ・コルタサルの意識 (おそらく他言語からの重訳と思われる) “No sigo el camino de los antiguos: busco lo que ellos buscaron.” (私は古人の道を追わない。彼らが求めたものを求める) であるが、前者は 1983 年、後者は 1984 年とほぼ同年代である。歳時記にも引用した月の句を含むホルヘ・ルイス・ボルヘスの「十七のハイク」(『命数』所収) 出版が 1981 年であることも考えると、この頃のアルゼンチンで、芭蕉や俳句への関心が急激に高まったことが窺える。
- 20) 市橋鐸による評釈を参照した。『新芭蕉講座』第九卷俳文篇、三省堂、1995 年、127-137。

参考文献

- アト・ド・フリース著、山下主一郎他訳、『イメージ・シンボル事典』、大修館書店、1984 年。
- 井尻香代子、「俳句の普及による価値観の変化」、『京都産業大学論集』『人文科学系列』第 47 号、pp. 87 - 102, 2014。
- 「スペイン語ハイクの韻律－アルゼンチン・ハイクの音声分析から－」、『京都産業大学論集』『人文科学系列』第 46 号、pp. 265 - 280, 2013。
- 「国際俳句と季語－アルゼンチン・ハイクをめぐる－」、『京都産業大学論集』『人文科学系列』第 45 号、pp. 315-331, 2012。
- 「アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容について」、『京都産業大学論集』『人文科学系列』第 44 号、pp. 22 - 37, 2011。
- 市橋鐸、「評釈」『新芭蕉講座第九卷俳文篇』、三省堂、1995 年。
- 頼原退蔵、『頼原退蔵著作集第十卷 (芭蕉二)』、中央公論社、1980 年。
- 『頼原退蔵著作集第十一卷 (芭蕉三)』、中央公論社、1980 年。
- 金子兜太、黒田杏子、夏石番矢、『現代歳時記』、たちばな出版、2001 年。
- 小宮豊隆、「総論」『新芭蕉講座第六卷俳論篇』、三省堂、1995 年。
- 二条良基、「連理秘抄」『連歌論集 俳論集』日本古典文学大系 66、岩波書店、1961 年。
- ピーターマン、ハンス、藤代幸一監訳、『世界シンボル事典』、八坂書房、1989 年。
- ファーバー、マイケル、植松靖夫訳、『文学シンボル事典』、東洋書林、1999 年。
- 松尾芭蕉、「常盤屋句合跋」『新芭蕉講座第九卷俳文篇』、三省堂、1995 年。
- 『新芭蕉講座第九卷俳文篇』、三省堂、1995 年。
- 『新芭蕉講座第一卷発句篇 (上)』、三省堂、1995 年。
- 『新芭蕉講座第二卷発句篇 (中)』、三省堂、1995 年。
- 『新芭蕉講座第三卷発句篇 (下)』、三省堂、1995 年。
- 宮坂静生、『俳句地貌論 21 世紀の俳句へ』、本阿弥書店、2003 年。
- 『語りかける季語 ゆるやかな日本』、岩波書店、2006 年。
- 『ゆたかなる季語 こまやかな日本』、岩波書店、2008 年。
- 『季語の誕生』、岩波書店、2009 年。
- Barreiro, Graciela, *Árboles de la Ciudad de Buenos Aires*, Vázquez Mazzini Editores, 2006.
- Borges, Jorge Luis, *La cifra*, Alianza, 1981.
- Cabezas, Antonio, *Jaikus inmortales*, poesía Hiperión, 1983.
- Coluccio, Félix, *Diccionario folklórico de la flora y la fauna de América*, Del sol, 2005.
- Cortázar, Julio, *Salvo el crepúsculo*, Nueva imagen, 1984.

- Durilén, Juan Carlos, *Gotas de luna: Haikus*, Edición de autor, 2015.
- Higginson, William J., *Haiku World*. Kodansha International, 1996.
- Mendiara, L. Neri, *Haiku III*, Dunken, 2008.
- Miyakawa, Liria et al, *Haiku: tanka senryu*, De Los Cuatro Vientos, 2007.
- Molina Alonso, Ángela, *Haiku por argentinos*, Dunken, 2006.
- Ota, Seiko y Gallego, Elena, *Kigo - La palabra de estación en el haiku japonés*, poesía Hiperión, 2013.
- Paciente, Roland L, *Haiku. Desde el camino*, Dunken, 2012.
- Ramos, Carlos A. Adrián, *Haiku*, Dunken, 2000.
- Rodríguez-Izquierdo, Fernando, Primera edición: *El haiku japonés*, Fundación Juan March, Colección Monografías, 1972. Segunda edición: Poesía Hiperión, 1994.

International Haiku and Season Words II

— A Proposale for a future Argentine Saijiki —

Kayoko IJIRI

Abstract

In this study, I examine the global diffusion of Japanese Haiku and its features in other languages. With regard to the Spanish Haiku in Argentine, I analyzed the process of acculturation, season words, metrics, and the change of perspectives. I recently came across a production of various poetic terms connected to seasons, that is, regional ecology, climate, life, religion, and cultural events with rich meanings. These can be compiled into a list of words to describe feelings about Nature and people's lives. In this study, I attempt to take the first step toward compiling an Argentine Saijiki -Haiku Almanac. First, I surveyed how season words have become essential in the History of Japanese Poetry and confirmed their actual status in Japanese Modern Haiku. Second, I examined different meanings attributed to season words in contemporary studies and in collections of International Haiku. Third, I picked up a few suitable terms for season words from Argentine Haiku Collections, adding comments and example poems, for entry into the Spanish Haiku Almanac. This attempt may help us understand more about the characteristics of Argentine Haiku and recognize the perspectives of Haiku in foreign languages.

Keywords: History of Japanese Poetry, International Haiku, Argentine, season words, Saijiki

